

週 報

「信じます。

不信仰なわたしを、

お助けください」。

(マルコによる福音書第9章24節)



人と神、人と人をつなぐ難しい働きをしています
日本基督教団 西宮公会教会

〒662-0834

兵庫県西宮市南昭和町 10-22

TEL 0798-67-4691

FAX 0798-63-4044

郵便振替 01170-3-4901

ホームページアドレス

<http://www.koudou.jp/>

電子メールアドレス

koudou@gamma.ocn.ne.jp

小さな手大きな手

(前週よりのつづき)

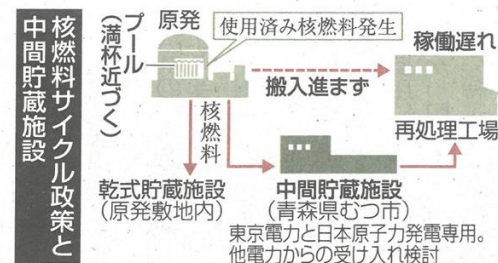
その「核燃料サイクル施設と中間貯蔵施設」については、前掲、朝日、毎日でも示されていますが、福島民報でも、以下のよう

に図示されています。
別に、電力8社の使用済み核燃料「貯蔵状況」は以下のよう

電力8社の 使用済み核燃料貯蔵状況				
電力会社	原発	保管容量	貯蔵量	貯蔵割合
北海道	泊	1070トン	400トン	37%
東北	女川	860	510	59
	東通	440	100	23
中部	浜岡	1300	1130	87
北陸	志賀	740	150	20
	美浜	620	510	82
関西	高浜	1730	1570	91
	大飯	2100	1930	92
中国	島根	700	480	69
四国	伊方	1050	790	75
九州	玄海	1540	1280	83
	川内	1340	1190	89

福島民報、
2026年8月13日

※電気事業連合会の資料から作成。％は小数点以下四捨五入。黄色は貯蔵割合が80％以上の原発。2026年6月末時点



で、言われている「貯蔵」なのですが、「再処理」して「再使用する」ことになっていますから「貯蔵」と言えなくはありません。しかし、その見通しは全く立っていません。再処理が可能になって、それを燃料として使うはずだった、「高速増殖炉」は、繰り返される事故の結果、廃炉が決まっています。しかも、再処理工場の稼働は「遅れ続け」て見通しが立っていません。

で、処理も行き場所も困って増え続ける使用済み核燃料は、「RFSに移す核燃料税収」を「念頭・目あて」にする青森県むつ市のRFS・リサイクル燃料貯蔵施設が、東電・原電に建設される、という具合になっているのです。

先の「貯蔵」と言い「リサイクル」と言い、それが見通せたとしても、「貯蔵」「リサイクル」という「幻想」の上に成り立っているのが原子力発電所なのです。

- ・8月18日 「次世代革新炉、原子力機、研究棟新設へ、人材育成拠点も」
- ・8月29日 「除染土の再利用、仙台できょう開始」
- ・8月30日 「除染土、仙台で再利用、都外初、国出先の植え込みに」
- ・9月1日 「高レベル放射性廃棄物最終処分場の文献調査、茨城・常陸大宮市に打診、国主体小笠原次ぎ2例目」
- ・9月3日 「福島第一原発、放射性廃棄物貯蔵庫、2029年4月ごろ完成、11棟目」

原発の稼働で生まれる「使用済み核燃料は、それぞれの電力会社の原子力発電所で「貯蔵」されている燃料が「満杯」が近づき、それは処理するはずの「再処理工場」の稼働が遅れて「搬入が進まず」、中間貯蔵施設への一時的な搬入、原発敷地内での「乾式貯蔵」が進められています。

しかし、そのいずれも、使用済み核燃料の処理ではなく、一時的な貯蔵以外のなにものでもありません。処理不能である為、これからも処理の見通しが立たないまま、とつても危険な放射能の毒を毒のまま保管することを意味します。

原子力発電所は発生する毒を処理不能のまま、「貯蔵」「リサイクル」という「幻想」であっても、稼働し続けるのです。

そんな「幻想」は、変りようも変えようもないにもかかわらず、「次世代革新炉」の研究が始められようとしています。「日本原子力研究開発機構は、既存の原発より安全性や燃料の燃焼効率を高めた『次世代革新炉』に関する研究棟を、茨城県の施設内に新設することを計画している」（8月18日、福島民報）。

で、研究の結果「既存の原発より安全性や燃料の燃焼効率を高めた」の「安全性」や「燃焼効率を高めた」は、いくばくか既存の施設より良くなるのかも知れませんが、扱っている放射性物質の「危険」は、どんな意味でも「安全」に扱うことは無理です。そして、その「次世代革新炉」の稼働で発生する、「使用済み核燃料」は、「運転開示時期」とされる「2040年頃」になっても、処理の見通しは立っていないはずです。

そして、「次世代」の中でも炉心の冷却にナトリウムを使う「高速炉」は、もんじゅで既に破綻しています。そもそも、原発の稼働、使用済み核燃料の再処理、そうして処理した燃料を、高速増殖炉もんじゅで使うという「リサイクル」は、破綻してしまっているのです。

原発の稼働は、どうであれ、稼働すればするほど、処理不能の危険な放射性物質を環境中に増やすことになる、あつてはならない危険な技術なのです。

それなのに、決して止めようとしないのは…。